

[dōnik]

DONC どんく

創立20周年記念号

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418

418, Komei-cho Tsu-shi

TEL 059-226-2766

FAX 059-229-0967

N° 78 janvier 2007

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE



ル・リデック大使と豊田会長

「全国日仏協会の集い」に出席して

豊田長康

平成18年11月10日、東京のフランス大使公邸において全国日仏協会の集いが開かれ、事務局長の滝沢さんとともに、出席いたしました。私は、フランス大使公邸を訪れるのは初めてでしたが、港区南麻生にあり、地下鉄日比谷線の広尾駅をおりて、フランス大使館に向かいました。フランス大使公邸は近くにはドイツ大使館やフィンランド大使館もある閑静な小高い場所にありました。建物は洋風でしたが庭は純和風で、それで特に違和感を抱かせないのは、洗練されたフランス文化の故かもしれません。

全国から各地域の日仏協会の方々が集まり、会場は結構込み合っていました。まず、今年着任をされたフランス大使のGildas LE LIDEC ジルダ・ル・リデックさんからご挨拶がありました。日本において積極的にフランス文化を紹介し、交流を戦略的に深めようとするたいへん意欲的なご挨拶でした。また、各地域の日仏協会の協力を大いに期待されているようでした。ただ、最初に話が長くなるというお断りがあったのですが、実際にたいへん長め

(P2 下段へ続く)

20周年記念旅行「リヨン・パリで年越しを」に参加しました。

三 吉 研 一

副会長の井土さんをご都合がつかなくなられて大変残念でしたが、滝澤事務局長を団長として、総勢9名で元気に行って参りました。最初の訪問地リヨンに夕方到着。霧で一寸先も見えない。とっても寒い。翌日は晴れ、夜にリヨン大学のレクレル先生、寺田先生、大学院生で四日市近鉄百貨店で研修をしていたジェローム君、三重大へ留学していたメラニーさんとお会いし、レクレル先生御用達のレストランで楽しい時を過ごしました。フランス人で日の短い冬でも食事は8時以降なのですね。30日にはTGVでパリへ。車窓からはいつものシャロレ牛、そして雪の降った形跡もないのに真っ白でキラキラと輝く木々。これって樹氷？

大晦日のパリ、夜の10時。いよいよカウントダウン。脇道は危険だとの忠告。外は雨。疲れた体。どうする？ 決死隊3名を編成しホテルを出てメトロへ。31日17時から1日12時までただになるメトロは超混雑。でも、いかつい警官が駅にも道路にもいっぱいいて思ったより安全。シャンゼリゼは11時30分より歩行者天国になる。晴れてきた。エッフェル塔も見たいと欲張りホコテンを後にメトロでトロカデロへ。ここも超混雑。そして新年。あちこちでシャンパンで乾杯している。フルーツグラスを持ってきている強者もいる。しまった、準備不足！ その時隣の人が紙コップを差し出してくれた。イタリア人でスプマンテ持参だった。乾杯！ 横の女性に「日本から来たよ」というと、「私はカリフォルニアから」あれ、違うグループか。でもみんなにここに、友達みたいだった。無事任務を終了。 (運営委員・津市)



リヨンのレストラン前

のご挨拶となり、たぶん1時間近く話しておられた感じもいたしますが、ほとんどの方々がじっと立って聞いておられ、最後のほうはさすがに皆さん疲れた様子でした。私は、フランス人はいつもこんなに話が長いのか、と周りの方に聞いたのですが、今回は特別であり、前大使の話は長くなかったとのことでした。

その後、食事の時間となり、フランス大使公邸ならではの小皿に載せられた各種のフランス料理を、立食形式で各自自由にいただきました。ワインと料理をご馳走になりながら、各地域の日仏協会の代表の方々と会話を交わし、情報交換をさせていただきました。100年にわたる歴史を持っている日仏協会もあれば、出来たばかりという日仏協会もあり、三重県の場合は創立20周年を迎えるとのことで、それなりに、私も胸を張ってお話することができました。高知の日仏協会の方は、11月の初めに三重県の賢島カントリーで行われたミズノクラシックをテレビでご覧になり、あのようなすばらしいゴルフ場に一度でいいから行ってみたい、とおっしゃっていました。私はたまたま賢島カントリーの会員だったので、ぜひご連絡くださいと申しておきました。日仏協会とゴルフとはあまり関係のない話ではありますが、理由はともあれ他府県の日仏協会の方々に三重県に来ていただいて、交流を広げることができれば、たいへんすばらしいことであると思います。また、三重県日仏協会の20周年のイベントにぜひ三重県にお越しいただくよう、在大阪・神戸フランス総領事館の方をお願いしておきました。

(三重日仏協会会長・三重大学学長)

松阪の水屋神社がブルゴーニュに「和光神社」分祀

前号でも経緯を紹介しましたが松阪市飯高町の由緒ある神社・水屋神社（久保憲司宮司・本会会員）が昨年11月1日、フランス・ブルゴーニュ地方西端のラ・モンターニュ村にある真言宗・光明院の敷地内に和光神社として分祀を終え、地元の人々を含む220人が参列して盛大な奉祝祭が挙行されました（写真）。日本の神社がフランスに造営されるのは初めてのことです。その前夜の10月31日にはパリのノボテル・ツール・エッフェルで宵宮（前夜）祭パーティーが営まれ、日仏150人の人々の参加で慶事を祝うとともに、雅楽などの日本の伝統芸能を楽しみました。同奉祝旅行団（本会后援）には豊田元子理事が参加しました。



フランス水屋神社奉賛旅行に参加して

四日市 豊田元子

宵宮祭が終って10時に奉賛団一行はバスでブルゴーニュのジアンへ移動する。私は、パリの旧友Agnèsの所に泊まって翌日朝早く出ることにした。

翌朝パリ・リヨン駅を7時に出発、8時58分ジアン駅に着いた。簡素な小さな駅、下車した人は10数人、駅前には3台タクシーがいた。同じ所へ行く人がいたら便乗させてもらおうと見回したがそれらしい人はいない。まず一台目のタクシーに“Le Temple Komyô-In, s'il vous plaît”と声をかけた。女性の運転手は私を見てL'arrièreと言ったのかderrièreと言ったのか良く判らなかったが、どちらも後ろにだから2台目に声をかけた。“Oui”と愛想の良い答えが返って来た。後ろのドアを自分で開け座ってヤレヤレ、一息ついて“Le Temple Komyô-In”行く先を言うと“Où ça?” えエエ…知らない？肩に掛けていた鞆のポケットの手帳を出そうと手を入れた。無い！手帳は列車に乗る前はあった、ジアンの到着時間を確かめたから。アドレス帳と手帳の入ったワイン色の10数年前から持ち歩いている大判の皮表紙、今回の行く先、予定、住所、電話番号、連絡先等全部記入していた。一瞬自分が何処にいるのか何処へ行くのかさっぱり分からなくなった。

ここは日本じゃないどう説明すればよいのか!? 焦った！焦った！3台目の運転手が私達のやり取りを聞いて地図を見せてくれた。一緒に地名を探してくれたが分からない。目的地に行くのはもう無理か！と思った瞬間、思い出した。私が、フランスに発つ前日私が、井土氏に行き先を説明した事を思い出した。オルレアンとジアンを結んだ線から右へ45度の方向と。

2台目の運転手は“D'accord”。そこで取りあえずその方向と思われる道を選んで走った。空は抜けるように青く美しく、視界を遮るものは何も無い広い草原の中の一本道を、対向車もなかったがすれ違うのは難しいような狭い田舎道を一台だけで車は走る。見た目はちょっとこわそうな運転手と、行く先を探しながら異国の地を走っているという不安を忘れさせてくれる程素晴らしい景色だった。50分程走った時、駅で地図を広げてくれた3台目の運転手から「寺の場所が判った。」と携帯電話が掛かった。BRAVO！運転手と私は歓声を上げて喜んだ。方角を変え日本では到底見られない大高原の中をスピードを上げて走った。兎に角行き先が判った安堵の気持ちと車窓の素晴らしい景色にうっとりしていると、くっきり引かれた遙か彼方の地平線にカブト虫が2匹列になって動く影が浮かんで来た。や、あや、や、よく見れば2台の大型バスが小さく見える。欣喜雀躍！思わず“Suivez cet autobus”と大声で叫んでしまった。やっとバスに追いついた。2台のバスからフランスの学生男女100人位が降りて来た。

Le voilà!! 運転手さん本当にありがとう。130ユーロだったが150ユーロ渡して彼の労をねぎらった。お蔭で午前10時30分光明院分祀奉祝祭の神事開始に間に合った。

参加者は300人位だったかな？全員屋外の儀式に参加。鳥居もお社もミュニチュアで少し高台に納められていた。祝詞が唱えられると若い沢山のフランス人が頭を垂れて聞き入っていた。三重県の村の鎮守の神様はブルゴーニュの村に鎮座されたのだ。

三重日仏協会代表で榊奉納、柏手参拝して鎮守様に見守られ無事到達できた感謝を申し上げた。

午後からは大きなテントに紅白の幕が張られた舞台で、日仏の芸能披露や、お茶会があり沢山のフランス人の目と耳を楽しませ、まことに得難い交流が出来て本当に有意義な一日であった。

三重日仏協会20年の歩み (主な主催事業を中心に)

- 1987年 3月7日 設立総会 初代会長に武田進三重大学長
記念講演：A. ベルク日仏会館フランス学長
- 4月1日 会報<donc>創刊号(現在78号にいたる)
- 7月11日 第1回「パリ祭」パーティー(昨年20回にいたる)
- 1988年 4月28日 総会 記念講演：F. デスクエット総領事
- 1989年 (フランス革命200年記念の年)
- 1月 「フランス語入門講座」始まる (以後毎年1~2回開催)
観光ガイドブック<MIE JAPON>発行、三重県へ寄贈
- 4月22日 総会 記念講演「フランス革命と絵画」：陰里鉄郎理事・
県美術館長
- 9月21日 A. トレ氏(パリ・レジスタンス博物館長)講演会
- 1990年 5月13日 総会 記念講演：R. ベレ総領事
- 5月30日 ルマン市長一行鈴鹿市訪問。歓迎会に協力
- 1991年 5月26日 総会 記念講演：A. ブリュネ立命館大学教授
- 6月~ 県立美術館と共催「日曜午後のフランス映画」12回
- 1992年 5月10日 総会 記念講演：A. デュクロ アリアンス・フラン
セーズ名古屋代表
- 1993年 5月30日 総会 第2代会長に武村泰男三重大学長を選出
記念講演：J-F. ダメモ理事・三重大学講師
- 1994年 2月19日 文芸講演会「フランスの詩、日本の詩」柏木隆雄大阪大学教授
- 7月17日 総会 記念講演：G. ドゥマゾー
ボルドー大学教授
- 10月~ 「まつり博みえ・94」に協賛
D. ドゥーセの店のパン試食会
フランス・ランド地方の民俗舞踊
団<ルー・クラボ・ド・セミセン
ス>25名を招請、博覧会会場ほか各地で公演と交流
- 1995年 7月9日 総会 記念講演：M. ワッセルマン立命館大学教授
- 9月4日 仏核実験に抗議してシラク大統領宛に会長名で電報
- 1996年 1月 会報<donc>35号増大号発行
- 1月20日 第2回文芸講演会 渡辺芳敬・横浜市立大学助教授
- 5月 J. ケルン夫人によるフランス語短期講座とプロヴァ
ンス料理を楽しむ夕べ(四日市)
- 7月14日 総会 記念講演：H. デュルト博士
- 9月4日 創立10周年記念コンサート(I)ラヴェル弦楽四重奏
団
- 12月19日 創立10周年記念コンサート(II)シャンソン・トライ
アングル
- 1997年<フランスにおける日本年>
- 7月6日 総会 記念フォーラム：「ほんとの日仏理解のために」
- 11月14日~リヨン市の「日本フェスティバル」に三重の箏曲演奏



donc 創刊号

ルネ・ベレ総領事 三重県庁を
表敬訪問(1990年)

ルー・クラボ・ド・セミセンス舞踏団(1994年)



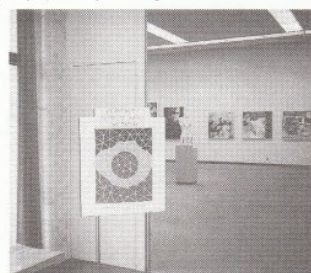
シャンソントライアングル(1996年)

「フランスにおける日本年」
リヨンのコンサート(1997年)

家 8 名と事務局、視察団12名が参加。現地で連日演奏会や交流会など。

1998年<日本におけるフランス年>

- 4月 リオン大学より初の企業研修生2名が四日市に
- 5月10日 日仏茶会(四日市・四翠庵)
- 7月5日 総会 記念フォーラム(Ⅱ)<J'aime la France>
ヴァイオリンとシャンソン演奏: J. マシュレさん
- 11月3日~南仏6人の芸術家による<太陽の地プロヴァンス>日本展(三重県立美術館)



「日本におけるフランス年」
太陽の地プロヴァンス展
(1998年)

1999年 2月26日 記念事業<みえ・にちふつの音楽家たち>コンサート

- 7月11日 総会 第3代会長に矢谷隆一・三重大学長を選出
記念講演: 柏木隆雄・大阪大学教授「バルザック<ファ
チーノ・カーネ>について」

10月23日~<南フランス親善の旅> グラブゾン市長招宴など各地で交流

2000年 1月22日 柏木先生のお話アンコール「バルザックの作品について」

これを機にバルザックなどの原書読書会が発足(現在、ユゴー「レミゼラブル」輪
読中)

- 7月16日 総会 記念講演: D. ドゥーセ氏(ドミニク・ドゥーセの店社長)
- 10月7日 第4回柏木先生文芸講演会: 「J. ルナールと日本の作家たち」

2001年 1月 三重日仏協会のホームページ開設

- 7月15日 総会 記念パネルディスカッション「日仏、その異質と同質」
- 11月15日 創立15周年記念ボジョレ・ヌヴォー・パーティー

2002年 5月29日~ 同 記念事業 現代南フランス3人展

(四日市・近鉄百貨店)

- 7月14日 総会 記念講演: 「政治とユーモア」 T. グットマン
三重大助教授

2003年 1月25日 第5回柏木先生文芸講演会「V. ユゴー パリの王
様の真実」

- 7月13日 総会 記念講演「フランス革命と当時のシャンソン」
講演とシャンソン 高岡優希・大阪大学講師



現代南フランス3人展
四日市近鉄百貨店ロビーでの
パフォーマンス(2002年)

2004年 3月12日 井上二葉ピアノ演奏会(フォーレ没後80周年記念)
共催

- 3月27日 第6回柏木先生文芸講演会「A. ドーデ<最後の授業>をめぐって」
- 7月11日 総会 記念講演: 「フランス現代思想入門」渡辺芳敬・横浜市大助教授

2005年 3月27日 第7回柏木先生文芸講演会「日本人はどのようにフランスを知ったか」

- 7月10日 総会 第4代会長に豊田長康三重大学長を選出
記念講演: 「バロン薩摩の夢を追う」野島正興・NHKりんくう文化センター長

9月1日~熊野古道の世界遺産登録記念「もうひとつの古道世界遺産サンチャゴ・デ・コンポ
ステラへの旅」共催

2006年 3月26日 第8回柏木先生文芸講演会「フランス人の見た幕末日本」

- 7月9日 総会 記念サロンコンサート メゾソプラノ・村林浩代さん
- 12月28日~創立20周年記念「フランスで年越しを」旅行(リヨン、パリ)

三重日仏協会 20周年によせる

三重日仏協会20年、創成期を回顧して

それはすべて東洋軒から始まった

鈴木善太郎

1987年3月7日、津市内は前夜からの降雪で5センチほどの積雪となり、山々と家並み、すべての景色が白く覆われた。津市広明町の県立美術館講堂では「三重日仏協会」の設立総会が開かれていた。記念講演したのは日仏会館（当時は東京・御茶ノ水）のオーギュスタン・ベルク学長で、会館の前を流れる神田川の原風景を紹介しながら、日本人の景観に対する美意識を、平安時代の「作庭記」（造園に関する作法書）、和辻哲郎などの著書を引用して論じた内容だった。

86年夏のある日、津市内のフランス語教室に通う岩本美砂子、喜田絃美、小林ちさと、武田治美、服部春美、藤田謹司、山田紀美、横山秀明、米沢みゆきと私の計9人が、津市内の老舗洋食店「東洋軒」で会食した。いずれも、フランス語専門学校リエゾン（大阪）がオーデンビルの一室を借りて運営していた教室の生徒たちで、派遣されていた主任講師のクリスティーン・アブリルは中性的な容貌と地球遊民（超国籍）的な感覚で人気があった。そこで話し合われたのは、慢性的な生徒不足から存続が危ぶまれていた教室をどうしたら維持していけるか、だった。その中で、津市を拠点に

した地方日仏協会を設立し、さまざまな活動も通じて、フランス語だけでなく、フランスの文化、経済に関心のある人たちをも含め、交流の場を設け、層を広げながら生徒数を広げていくアイデアが浮上。9人が協会事務局メンバーとして活動の主体となることも、ここで決まった。

三重大学人文学部で政治学を教えていた岩本を通じて、話を聞いた三重大学人文学部の小堀巖教授が、協力してくれることになり設立構想は一挙に現実味を帯びた。小堀はパリ日本館の館長を務めたことがあり、新しい協会の顔となる会長に武田進・三重大学学長の就任を働きかけてくれた。既知の間柄であるベルクの記念講演も彼の発案によるものだった。

設立当初から、メンバーによる三重県観光ガイドのフランス語版作成と発行（印刷に関しては喜田絃美の活躍が大だった）、武田治美と松阪市在住のフランス人ダメモを講師にフランス語入門講座を開催するなど、意欲的に取り組んだ。しかし、もともと語学教室を母体に構想されただけに、その内容は限定的なものだった。井土真杉が事務局長に就任すると、会員の層もさらに広がり、フランスからの舞踊団、演奏家の招請や協力、コンサートの開催、革命記念日のパリ祭イベントなど活動は充実した。設立から20年を経過して三重県内の国際交流団体、全国の各地日仏協会の中でも、その存在はひととき目立っている。（文中 敬称略、肩書きはいずれも当時）

筆者紹介 設立当初の運営委員の一人、当時は中日新聞三重総局記者、現在は編集局放送芸能部勤務。



1986年夏 津市大門のディスコ&バーMAISHAで

17年前に学んだこと

大岩 ゆり

三重日仏協会の大多数の皆様はじめまして。そして一部の方は、お久しぶりです。仕事の関係で1985年から約3年、津市にいた間に、お世話になった大岩ゆりです。つい最近、井土さんからご連絡を頂き、三重日仏協会が今も盛んに活動なさっていると知って嬉しく思っています。

私が三重県に赴任したのは大学を卒業してすぐでした。三重では新米社会人として色々なことを覚えさせて頂きましたが、その中でも私のその後の人生を豊かにしてくれたことのひとつが「お酒」でした。

社会人になるまでお酒はまったく飲めなかったのに、三重日仏協会の皆さんの「ご指導」もあり、三重にいる3年弱の間に、うわばみ扱いされるまでにすっかり「成長」しました。とはいえ、三重にいた時代にはお酒の味がよくわかっておらず、日本酒やワインはほとんど飲んでいませんでした。

最近ようやくお酒の味が多少はわかるようになりました。よく飲むのはワインです。ワインを飲み始めたころはボルドーが好きでしたが、今では完全にブルゴーニュ派です。

昨年夏にブルゴーニュを訪問したのが決定的でした。最初からブルゴーニュに行こうと思っていたわけではなく、1週間の夏休みをボルドーで過ごすかブルゴーニュで過ごすかさんざん迷った末に、何となく直感が働いてブルゴーニュにしました。

domaineを訪問したり、収穫前のブドウ畑を回

るバスツアーに参加したりして、ブルゴーニュワイン作りの「決まり」について色々とお話をしました。ブルゴーニュの気候は比較的乾燥していますが、ブドウ畑にはスプリンクラーがありません。ブルゴーニュでは禁止されているそうです。どんな天候になろうと、与えられた自然環境の中で育てたブドウでワインを作るのがブルゴーニュ流だそうです。ワインの醸造過程で糖分などの成分を加えることももちろんありません。そんな話を聞いて、頑固な職人のようではないかと思いました。

その思いがさらに強くなったのは、昨年秋に日本で公開された、ワイン生産者のルポルタージュ風の映画「MONDOVINO」を観てからです。ワイン界のグローバリゼーションと、グローバリゼーションに対抗して、あくまで地元の伝統的な手法を貫くブルゴーニュワインの作り手たちが対比的に描かれていました。あの映画をみて、ますますブルゴーニュ派になりました。

もちろんボルドーのワインも好きです。でも、数多くの伝統的作法に縛られながらも個性的なワイン作りをしているブルゴーニュの生産者たちを大切にしたいと思います。

私が三重にいたころはまだワインが飲めなかったのも、日仏協会の皆さんとこんなお話をすることがなかったのは心残りです。いつか機会があれば、ワインの話でも交流を深めさせて頂きたいと願っています。（朝日新聞社「AERA」記者）

「三重日仏」20年の歩み、フランス20年の歩み…

伊藤 隆之

この度は、三重日仏協会20周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げますと共に今までのご尽力に感謝申し上げます。

さて、20年といえますと、さぞかし仏語、仏文化に詳しいだろうと言われると穴に入るしかないので大きな声では言えませんが、実はフランス音楽を研究してやろうと乗り込んで住みついてしまっ

た私のフランス滞在年とほぼ重なります（古い友人から「伊藤君ってパリで浮浪者やってるんだって？」と言われた事もあり）。

教会を数百年かけて作る国なので20年で何が変わったかというとは殆ど何も変わっていないのですが、生活していて気が付いた点など記してみたいと思います。私の体験が、たまたまの事もあ

り得ますし、これだけで「フランスは」というモノではありませんので、その辺はフランスチックにおおらかに読んでいただければと思います。

この20年で大統領がミッテランからシラクに等社会的な変化はありましたが（渡仏当時はミッテランの再選を喜ぶ多分替え歌なんてのが巷で聞かれました）、何といても一番の変化と言えば欧州共同体の発足に伴うユーロ貨幣の導入でしょう。便乗値上げを避けるため、フランがなくなる前の秋から値上げ禁止のお達しがあったので、レッスン代等収入の値上げをしないよう税務申告等で気を遣ったのですが、蓋を開けたら一般の物価から何と公共の物まで何気なくしっかり値上げしとるやんけ！とマジメにしていたのは自分だけだった事にふと気が付いた記憶がまだ鮮明に残っています。同じ規格で作ったはずのユーロ硬貨が、隣の国の自動販売機で使えない、なんて事も当時はありました。ユーロの下の単位のセントは仏語の百と同じで紛らわしく、未だにフランスだけcentと書いてサンチームと読んでいる所が何とも渋く、ユーロ導入直後の小切手には「ユーロの方のサンチーム」まで書かないといけなかった混乱もありました（事前に話し合わなかったのでしょうか？）。今もフランでいくらになるか考えないと物の値段が解らん、という言葉を目にします。

私が渡仏した頃は、当時パリ12区のはずれの方にいたせいもあって、モノプリ等スーパーは10時から開店し、お昼休みが2,3時間、それで夕方は5時、6時には閉まっていたので、開いている時間の方が少ない！であったのを覚えています（勿論日曜はお休みで、店員は閉店時には帰る権利があるとかで、閉店15分前位から追い出され、閉店時間には施錠されていました）、今はコンビニこそありませんが（コンビニは治安の問題上無理なのでしょう..例えば夜間のガソリンスタンドの支払いは、付随のプティックを閉鎖し施錠して、防弾ガラス越しに係員に支払うのですから..頼めば夜中でもスタンドでワインを買うことはできますが）ここ10年位でお昼休みは消滅し、曜日によっては夜10時まで開いているスーパーもあり、大進歩！

フランス人の労働意欲とサービス精神はごく一

部のエリートを除いておおらかすぎるので、レジや窓口で長蛇の列になっていても「気にしない（気が付かない）」で隣の係員とおしゃべりしたりして、買い物等で1日が終わる、という事は当たり前でしたが、バーコードの導入などで、混雑時のレジ通過が長いと1時間以上だったのが長くても1時間以内に短縮になり大改革！それでも何故かバーコードがうまくいかない事が多く、レジの人がデスクに電話、数分後に係員が売り場に行って値札を見て言いに来る（値札が見つけれず勝手に却下される商品もあり）というおおらかな形態は昔ながらですが、その値札探索隊が今はローラースケートを履いている事が多く、走って来るより数秒短縮となり大進化！（何のためのバーコードでしょう？）と思いますが、この人達の走行技術は絶対人に衝突しないプロで、何故かイケメンのお兄さんや美しいお姉さんだったりする）

そして、昨12月には今まであり得なかった変化が！..最寄りの郵便局は、今どき昼休みは2時間あるわ、窓口は少ないわで、不在通知の荷物を取りに行くだけでも1時間はかかるいやな局だったので（20年前は半日かかっていたが）、3つある窓口全部に係員がおり、殆ど誰も並んでいない！結局15枚ほど欲しかった日本行きの切手付き大型封筒（普通に送るより安い）は無く、もうちょい大きい所に行ったらやはり窓口が全部開いていて（しかも朝8時半に！）やはり並んでいない！それでも欲しい封筒がなくて、言われて本局に行ったら、列の前に係嬢がいて、日本の郵便局みたいに「何かご用ですか」と言われ（最近は何と聞くのだけが専門で結局何も変わらない方がいらっしゃる事はありました）封筒が欲しいと言い



伊藤隆之さん演奏によるドビュッシーピアノ曲集 CD

ましたら別の窓口案内され、探してもらっている間「今は日本人が多いですねえ、私は日本人学校の近くにすんでいるんですよ」と話しかけられ、「ウチのカミさんはそこの教員です」なんてやりとりがあって、ここは本当にフランスなのかと思っっているうちに結局売り切れで1枚も手に入らず、田舎に繰り出して、そこの郵便局でゲットとなったのですが、これだけのメニューを1日でこなせるなんて正に大革命！と、初体験の師走の特筆すべき出来事（でもないか）に遭遇したのであります。

私はドビュッシーの音楽を研究、無名の曲も調べてCDにしようと制作中ですが、最新作となるCDの収録場所として予約していた教会の隣で突然アパートの解体工事が始まり、雑音を避けながらの朝4時まで4日間という録音を致しましたが、その後の編集作業は雑音のないテイクを採るので仮編集は大変で時間がかかったと伺い、その後私ものんびりしていたのが悪いのですが、録音から随分経って本編集のランデヴーを焦って申し込ん

詩人庭師

18年前、日本へきたとき私には仕事がなく、数週間後に庭師になることや、2年後には国立大学の教員になることも想像だにできなかった。

まず私は義父の友人である阿部さんについて庭師の仕事を始めことにしたのだが、この人が私の日本に対する理解と愛着に大いにかかわっていることは確かだ。阿部さんは親切で、驚くほど根気強い人で、物事を処理するにあたっては最も平静に分別をもってしなければならないことを、そのいたずらっぽいまなざしの裏で私に教えてくれたように思える。日本庭園こそは日本のイメージそのものであって、長寿の象徴である。それはまた哲学に満ちている。といってもあのリセで苦勞して勉強する哲学ではなく、人が手で植えつけ、永遠に存続し、あなたが日本庭園に入ったときに心臓の鼓動をとめてしまうような、そんな哲学なのである。1トンを超える重い石を、炎天下に1日ばかりでやっと備え付けたのに、どうしてその

だら「じゃ、2ヶ月後に」とあっさり言われ拍子抜けしたり、巷には「スピーディー」というそれだけはやめとけよと思うようなネーミングの車の修理屋があったり等はしておりますが、比較級で見ると本当に以前より社会全体が早くなってる！メトロなどで駅名の車内アナウンスが、そしてRER（高速郊外線）などは今までは何の表示も無かったので、到着した列車が何処行きか殆ど解らなかったのが、行き先と「電車がホームに近づいています」なんて表示が出る壊れていないテレビが増えており大快挙！、カミさんと娘によると、以前はスヌーピー等のキャラクターは「べべ（赤ちゃん）みたい」と馬鹿にされていたのに今や中学生がハローキティグッズを持っていたりして（むしろフランスの方が退行している？）今や子供のパラダイス！

あなたもこんなにスピーディーで便利になったフランスに住んでみる？

（ピアニスト・四日市出身 パリ在住）

ジャン＝フランソワ・ダメモ

翌日にはたった数センチだけまた動かさなければならぬのか？新参者にはこの数センチの差が日本庭園の魂と美しさ、美学を決定的に変えるということが決して理解できないだろう。私は自分の日常生活のなかでも、このわずかなセンチメートルの大切さを理解したと誇りをもって言うことができる。またそのことがその後のわたしの人生航路にたいへん助けになっているということも。

阿部さんの私へのメッセージは静けさのメッセージといえよう。いつまでも木の下に座って、鯉が泳ぐのを眺め、風のそよぎや木々の音を聞いている気持ちのような。彼のおかげで、たくさんの庭石や百歳を越えた木々に囲まれてそのささやきに耳をそばだてていると、世の中で自分が最もしあわせな人間であると思ってしまうのである。

（三重日仏協会理事・パリ出身）

※原文はフランス語、編集部で訳しました。

旅心と日仏とドンク

吉田道代

大好きなフランスを忘れないための架け橋とも言える存在。それがわたしにとっての日仏協会。その付き合いはフランス繋がりのきっかけにと参加させていただいてから20年近く、傍らにさり気ない感じで居てくれる友のようである。

わたしにとってのフランスは日常から切り離された夢見がちな時間だったり、時には刹那的なスクリーンの一瞬のようであったり、旅先でのかけがえのない思い出がいっぱい散りばめられた時々身近で遠い国。“パリ”この響き…この街角の空気に触れるとたちまち虜になってしまう。誰もがそれぞれの想いを抱えながら集う年に一度の『パリ祭』、フランス愛好家で個性豊かな日仏協会の人たちとの出会いやウィットに飛んだ不思議空間の中で美味しいワインとエスプリの効いた盛り沢山のゲームに興じながら最高の至福時を過ごしているわたしである。改めて感じることは日

仏無くして語れない“我がフランス好き人生”なのである。

この度は日仏協会生誕20周年を祝しまして心からお喜び申し上げます。益々の発展をお祈りしつつこれからもどうぞ宜しくお願いします。この気持ちを運営委員会の皆様にお伝えたく、一会員として投稿させていただきました。

これから秋色深まり晩秋へと向かう日々、温度差こそあれ肌に感じるこの季節の空気感がとてもヨーロッパ的でそんな毎日の中から心のままの独り言を綴っているとさらにフランスへの想いが加速しそうな勢いです。先頃、会報どんくでも紹介された津市「カフェ・ドルチェ」中村裕美さんの“フランスabc”をベッドの小脇に置いて眠りに就く夕べ。今宵も素敵なパリの街角を旅してる…そんな夢に出会えますよう… Bon rêve…

(津市・2006年10月記)

ルボブ画伯邸の晩餐会

井土真杉

フランス人またはフランスに長く住んでいる日本人のお宅で食事に招かれるとき、必ずと言っていいほど決まった作法がある。まずは客間に通されてしばし歓談、そのときアペリチフとおつまみが供される。多くの場合、甘い果実酒を白ワインで割ったキールのような酒にナッツ類やオリーブ、ひとくちサイズの冷菜といった組み合わせで巧みに食欲を誘うのであるが、ある在仏の音楽家のお宅にお邪魔したときは冷えたシャンパーニュになんと鉄火巻きが用意され、その豪勢で意外なリアージュに感激した思い出もある。さてそして機が熟すると別室のテーブルに案内されて食事にとりかかるという按配である。

旅行中の食事というものは、その場所、風景、同席する人、そして料理と酒などがあいまって、一回一回が強く記憶に刻まれるものだが、1999年秋、協会のメンバーでの旅行中、招かれたエクサ

ンプロバンス、ルボブ画伯邸での夕食会は特に忘れることのできない体験だった。その前年と前々年は政府レベルの協定で「日本年」、「フランス年」と続き、わが三重日仏協会も文化交流事業としてリヨンでの箏曲演奏会、南仏の6人の芸術家による展覧会（県美術館）など大型のイベントに取り組んだのだが、その旧交を暖める目的で会員による南仏とリヨンへの旅行を計画したのであった。

一行8名深夜近くマルセイユに着くと、前年津に来た二人の芸術家アルランディスとシモン、それにこの交流をコーディネートしてくれた世古由里子さん（三重県出身）が出迎えてくれ、早速街はずれの<ロマラン>というピッツァ屋さんで歓迎の宴。翌日には6人の画家のうち長老のルボブ氏を除く5人の芸術家と、日仏交流に熱心な事業家ルボブ2世も参加して、港に近い<マリウス>でこれぞ本場もののブイヤベースの昼食会を開い

てくれたが、南仏らしい陽気な人物が多く、プロヴァンスのロゼも手伝って昼から大いに盛り上がった。そしてその夜、真打ちのルボブ画伯家の晩餐会に招かれたというわけである。

クロード・ルボブ氏は若い頃F. レジエに学んだ経歴の持ち主で、船乗りもしたという80歳、エクス市の住宅街で庭付きの古風で堂々たる邸宅に住んでいた。画伯にアトリエとたくさんの作品を見せてもらったあと、シャンパーニュが準備された見事な調度のサロンに集まる。客は私たち一行のほかにシモン夫妻と、それにおそらく生涯忘れられないであろう見るからに親密なカップルがいた。それは6人中唯一の女性画家ラファエル・ゼキエロと、名は失念したがかなりの年配の男性。自称20代のラファエルは長身で色浅黒く髪はみつ編み、ヘそを出した装束で、画風も個性的だったがその風貌もすごい。一方お相手の男性は、言うのも失礼だが顔は土気色でやせ衰え今にも倒れそうな様子が痛々しい。聞けば癌を患い余命いくば

くもないとか。でも無口なラファエルに比してこのご病人は、いろいろと私たちに話題を投げかけ雄弁に語ってくれるのだった。

隣の食堂に大きなテーブルがセットされ、それぞれの席が厳密に指定される。ホストの画伯が真ん中で、その正面の席に「団長」格の私、私の隣にルボブ夫人という具合。画伯の歓迎の言葉に対し、促されて私が自分にだけはよくわかるフランス語でスピーチもした。お昼のブイヤベースの影響と睡眠不足もあって食欲はいまひとつだったが、なんとも晴れがましく楽しい宴であった。私と同年代の夫人から聞いたドイツ機の空襲の経験談は他人事と思えず、画伯に土産にいただいた年代物の<ACブルゴーニュ・ルージュ>は数日後、パリで伊藤隆之さんと飲んで美味であったことも忘れられない。

重病を押して参加してくれたかのムッシューが亡くなったというニュースを聞いたのは、それからまもなくのことだった。 (副会長・津市)



まずアペリチフはシャンパーニュで
(左側のカップル注目)



テーブルについて

創立20周年記念事業予定 ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

3/18
(日)

柏木先生 文芸講演会 〈フランソワ・ヴィヨンから「ヴィヨンの書」へ…太宰治の挑戦…〉

いつも興味深いお話ですっかりおなじみとなった大阪大学・柏木隆雄教授（松阪市出身）には、今年も創立20周年記念事業の一環として下記のように文芸講演会にご登壇ねがうことになりました。今回は最近のご研究の一端をお話しいただけるとのことで、会員各位はもちろん広く一般の来聴を期待します。なお表題のF. ヴィヨンはフランス中世末期の叙情詩人で、放蕩、犯罪など無頼の生涯を送ったことで知られています。

日 時：3月18日(日) 午後2時30分より（2時から受付）
場 所：アスト津3階（津駅前）
入場無料、一般公開とします

5/26
(土)

コンサート 〈みえ・にちぶつの音楽家たち〉II

去る1999年「日本におけるフランス年」を記念して開かれ成功をおさめた表題のコンサートを、会創立20周年の主要事業としてふたたび開催することになりました。三重日仏協会会員の音楽家たちの演奏を中心に、今回も二人のすぐれたゲスト演奏家を招くなど、いまピアニストの針谷宏弥さんを中心に計画が進められています。開催日と会場は決定しており、さらに詳しい内容は次号〈donec〉でお知らせします。

開催日：5月26日（マチネの予定）
会 場：津リージョンプラザ・お城ホール

INFORMATION

ボジョシの村でフランス語の勉強

事務局に届くフランスでの語学研修の勧誘のなかで、最近送られてきた少し毛色のかかった企画をご紹介します。主催者は近年関西に3年間住んでいたアンナ・セカルディさんという女性で、大好きな日本人との接触をたもつことを目的のひとつに、1週間単位のホームステイでフランス語のレッスンをし、あわせて観光を楽しんでほしいとの趣旨。場所はワイン好きにおなじみのボジョレ地方の村ジュリエナ、ぶどう畑に囲まれた一軒家とのことです。

興味のあるかたは：abientot_alamaison@yahoo.co.jp